＜2023年度　第3回定例研究会＞

満蒙開拓引揚集落での映画上映会の取り組みと記憶の継承

講演：高 木　　亨（淑徳大学地域創生学部教授）

日　時：2024年1月17日（水）

1．研究会の概要と高木先生

2023年度第3回定例研究会は、「満蒙開拓引揚集落での映画上映会の取り組みと記憶の継承」と題し、淑徳大学地域創生学部教授で地理学者の高木亨先生をお招きして開催した。高木先生は、2016年から2021年にかけて熊本学園大学社会福祉学部で教鞭をとっておられ、筆者の同僚であった。高木先生のご研究、ご活動は多岐にわたり、その仕事量には畏怖の念を覚えるほどであるが、どのお仕事であっても共通するのは、現場や対象に向けられた温かい眼差しと熱い心である。

今回の講演は、案内チラシに「現在居住している軽井沢町大日向地区は、戦前日本初の分村移民として満州に渡った人たちが戦後再入植して開拓した集落である。地域活動を通じて知り合った『開拓二世』の方たちと地区の記憶継承の取り組みをおこなっている。本講演はその一環として実施した映画上映会について、その取り組みについて紹介し、地域の記憶継承について考える機会としたい」と記されているように、高木先生の社会活動と研究が一体となった内容で構成されている。「満蒙開拓」は、ややもすれば、我々の普段の暮らしからは遠くに感じられがちである。しかし、大日向村の「分村移民」から見出せる、国策に翻弄されていく人々の姿は、遠い昔のことでも、人ごとでも全くない。（2024年度社会福祉研究所研究会のテーマである「持続可能な社会」の文脈においても）満蒙開拓の歴史を理解すること、継承していくことの重要さについて、高木先生の講演を通して改めて思い知らされた。そしてそれが高木先生の居住地（暮らしの場）から語られることにも、大きな意義が感じられる講演であった。

研究会当日は、会場にたくさんの聴衆が訪れ、またオンラインでも多くの参加者があった。また様々な立場からの活発な意見交換がなされ、非常に有意義な研究会となった。高木先生にあらためて御礼申し上げる。

以下、講演内容を筆者なりに整理しておく。高木先生のお話は質・量共に非常に充実した内容であったが、筆者の筆力の問題から、ごく簡略な整理となっていることをご容赦いただきたい。

2．地理学者たる高木先生が大日向村を語る意味―「国策」

講演の冒頭で、「なぜ地理屋が満州大日向村の講演をするのか」として、福島で復興研究を重ねてこられた高木先生のご経験・問題関心と、大日向村に対するまなざしが重ね合わせて語られた。「福島」「大日向村」それぞれに共通するキーワードは「国策」である。国策としての「原子力政策」、国策としての「満蒙開拓」、そしてそれらに対する「知ってしまった者の責任」として、また「研究者」「半分当事者」として、「自身の講演が経験の継承の一助になれば」と高木先生は述べた。

満州開拓は、1936 年に「20 年間で 100 万戸」を目指して位置づけられた、まさに「国策」である。中でも大日向村は、全国で最も多くの開拓団を送り出した長野県に属し、全国初の「分村移民」（土地に対して「適正」な人口を定め、その上で「過剰」な農家を移民させる）の事例として注目された。アサヒグラフで特集が組まれ、小説『大日向村』はベストセラーとなり、演劇化・映画化もなされた。大日向村はまさに国策のプロパガンダとして利用されたのである。

3．満州大日向村の 7 年 5 ヶ月

現在の長野県佐久穂町にあった大日向村から「満州大日向村」へは、1938 年から三次にわたっての移住があり、小学校・農協・診療所、さらに「大日向神社」が設けられて、「日本化」が進められた。1945 年 9 月までの 7 年 5 ヶ月の間、入植生活が営まれたのである。

この満州大日向村は、肥沃な水田・畑作地帯である吉林省舒蘭県四家房にあって、"開拓"をする必要がないような土地が用意されていた。それは、満州の人たちの田畑を（奪ったと言っていいほどに）安く買いたたいて用意された土地であり、「国策」たる分村移民の嚆矢として、条件の良いところへ大日向村の人々を入植させたという背景があった。

4．敗戦・帰国から「軽井沢町大日向村」入植

満州大日向村での暮らしは、日本の敗戦をもって終わりを迎える。その後の苦難に満ちた帰国について、研究会配布資料から該当部分の年表を抜粋して以下に示す。

敗戦から新京へ（1945 年 8 月～9 月末）

8 月 18 日	武装解除
8 月 19 日	大日向神社、放火され全焼
9 月 3 日	未明に第 5 部落が暴民に襲撃（人的被害無し）
9 月 4 日	未明に第 5・第 3 部落襲撃（死者 5 名、負傷者 16 名）以下、毎日略奪が続く
9 月 9 日	朝 5 時～9,000 人・馬車 350 両の抗日武力集団が襲来全戸から一物も残さず略奪（自決者 8 名、戦死者 10 名）
9 月 12 日	夜までに、守りが強固な第 2 部落へ全員集結し立てこもる 日本軍の脱走兵 3 名が団に加わる（この間死者行方不明 21、負傷者 18 名）
9 月 24 日	夜明けにソ連軍・中国公安隊から退去命令 団長が新京まで安全に避難できるよう交渉

→新京へ移動
移動に 4 日かかる（通常 8 時間）途中、金と女を要求されるが犠牲者はなし（無蓋車：屋根のない貨車にて移動）
9 月 27 日　新京（長春）到着、旧日本軍下士官官舎へ（新京日本人会の炊き出し）

抑留から帰国まで（1945 年 10 月～1946 年 9 月）
11 月～　ソ連軍の収容所侵入が相次ぐ（金品の強奪）
～12 月末　不衛生な集団生活（畳一帖に 3 人）、寒さ、発疹チフス、赤痢等発生栄養失調等で、5 歳以下の大部分が死亡（背景に 3 人の軍人の横暴）
1946 年 1 月～　大人の死者が続出（1 日 5～8 人、一家全滅 6 家族）
2 月　日本人墓地が緑苑地区にできる
2 月 16 日　堀川清躬団長死去→堀川源雄団長へ
6 月　帰国が決定（7 月 17 日出発）
7 月 17 日　南長春駅から貨車に乗り出発
7 月 24 日　胡盧島から VO27 号リバティに乗船
7 月 27 日　舞鶴港入港、これら患者発生のため上陸中止
佐世保港へ回漕。沖合停泊 43 日。この間 53 人死亡
9 月 9 日　佐世保港上陸、もと海兵団宿舎（引揚援護局）にて DDT 消毒
9 月 10 日　南風崎駅から故郷の羽黒下駅へ
9 月 13 日　羽黒下駅着　栄キネマにて歓迎会
→帰国者 395 人、犠牲者 389 人※半数近くの方々が長春での抑留中に落命
（第 3 回研究会配付資料から一部改変して掲載）

このように、満州から困難を極めて帰国した大日向村の人々であったが、満州への渡航時に財産を処分していたことから、元の村に長く留まることはできず、1947 年には現在の軽井沢町に入植することになる。この「軽井沢町大日向村」では（「満州大日向村」と異なり）人々は文字通りの「開拓」作業に従事することになるが、20 年にわたる人々の努力は、乳牛 230 頭、鶏 1520 羽、役牛 75 頭、豚 125 頭、畑面積 125 ha を備えた「酪農と高原野菜の村」を現出させている（1970 年）。

しかし、農業者が開拓地を国から買い取る制度になっていたこと、また軽井沢が避暑地として注目されるようになったことなどから、農業以外の仕事に従事する人が増え、軽井沢入植から半世紀以上が経過した現在（2024 年 1 月）では、当該地域の農家は 1 軒のみとなっている。

5．継承の取り組みと今後

このような国策に翻弄された大日向村の分村移民の歴史は、それを継承する取り組みが有志によって試みられている。2018 年の映画「大日向村」上映会・講演会および 2019 年 5 月の「舒蘭会友好訪中団」による旧満州大日向村の訪問は、人々を「誰がどの部落に暮らしていたか、全貌が分からなく

なっている」「満州入植後 80 年が経って、（子どもながらも自身が満州に渡った）開拓 2 世には断片的な記憶しか残っていない」という現状に直面させ、「貴重な記憶を記録し残す」ことの重要性に思い至らせることになった。

さらに、2021 年 6 月に「舒蘭会友好訪中団」の報告会と（高木先生が講師を務めた）講演、同年 12 月には佐久穂町公民館にて（高木先生が事務局を務めた）映画上映会開催と、継承の試みが続けられているが、高木先生は今後の課題として、「継承者の世代交代」「新たなアクターをどのように取り込んでいくのか」を挙げ、また「サポーターとしての研究者の役割」に言及しながら、「軽井沢町開拓 2 世（戦後生まれ）のアイデンティティをどう考えていくか。その中で、地域の歴史や暮らしをどう考えるか。そこに結びつけていきたい」「新たな展開として、外部から地域に入ってきた理解のある人と組みながら、歴史を伝えていくこともできるのかなと考えているところ」と述べている。

（研究会報告者：藤本延啓）